

蝶の皇軍

富田求

○太平洋戦争の映像

N 1941年12月8日 日本は太平洋戦争に突入した。海軍は、ハワイ真珠湾の奇襲攻撃に成功し、陸軍は、マレー半島上陸後、東南アジアの植民地を次々占領していった。しかし、翌6月5日のミッドウェー海戦では、主力空母4隻を撃沈され、また12月のガダルカナル攻防戦にも敗れ、日本の敗色は濃厚となった。そして、大本営の無謀な作戦により、南洋の島々では戦闘よりも飢餓と疫病、自決によって何万もの兵士が戦死すると言う凄惨な玉砕が繰り返されていた・・・

○戦場・岩陰

迫撃砲と機関銃により、戦場は煙に包まれている。
バーン、バーン。ドン、ドン、ドン。
アメリカ軍の照明弾により、昼間の様に明るい。
ダダダ——ン。ドーン、ドーン！
激しい銃撃が続いている。その閃光が走る戦場を兵士たちが逃げ惑っている。

負傷者を抱えた大宮小隊。

大宮小隊長「(必死で)おい！あっちだ！」

小隊が上手に走り去る。
すぐ戻ってくる。

久保軍曹「ダメです！敵の主力が迫っています」

バリバリバリ。バーン！

大宮「そうか！後方に行こう！」

小隊が負傷者を抱えながら、下手に逃げ込む。
また、すぐ戻ってくる。

伊藤上等兵「こちらもダメです！」

ドンドン、ドーン。

命からがら、やつとのことで舞台下手にある岩陰に隠れた大宮小隊の7人。

大宮「久保、隊の状況は？」

久保「は！小隊は現在7名。内3人が負傷しております」

大宮「あとはどうした？」

久保「行方不明です。恐らく戦死したものと思われまます」
バリバリバリ。ダダドーン。

大宮「そうか・・・」

ドン、ドン、ドン。

砲撃が激しくなって、迫ってくる。

小さな岩陰に、身を寄せ合う小隊。

久保「まさか壕の前で待ち伏せ攻撃されるとは・・・」

大宮「とにかく集結命令通り、東地区の守備隊本部に合流だ」

久保「正面から攻撃されています。南地区に向かうしかありません」

大宮「いや、南地区は大隊長が戦死し、ほとんど全滅している」

伊藤「本部は、大丈夫でしょうか」

大宮「本部は、山岳地域の地下要塞になっている。北に迂回し本部を指そう。行くぞ！（方向を変える）」

大宮が、警戒しながら動こうとする。

バリ、バリ、バリ！ドン、ドン。

久保「負傷兵は、どうしますか」

田中一等兵「（左足の貫通銃創）歩けます。連れて行ってください。お願いします」

田中は、不自由な足で前進しようと必死にもがいている。

高橋一等兵「自分が背負って行きます」

田中「高橋、頼む」

田中が泣きながら高橋にしがみつく。

久保が田中を突き放す。

久保「負傷兵を連れていくのは無理だ。足手まといになるくらいなら、

いっそこで」

久保銃を構える。

田中「お願いします。連れて行ってください」

同じく左肩を負傷している宮沢は、じっとやり取りを聞いている

マリアの高熱で動けない関本は、右手に握った手りゅう弾を見
せて、久保を鋭く睨む。

関本上等兵「軍曹！（凄みを利かせて）俺も動けねえ。やれるもんなら

、やれよ」

久保は、怖気づいて関本から目を逸らし、銃を下す。

久保「(捨て台詞) ふん、死にぞこないの上等兵が」
ドン、ドーン!

大宮「我々も本部に合流できるか分からん。負傷したお前たちは、ここで援軍を待て」

宮沢一等兵「援軍は来るのですか」

大宮「来る。必ず来る。大本営はバタ島守備隊を見捨てはしない」

田中「はい」

宮沢「・・・」

大宮「ここで耐えろ。敵に発見されたら、手りゅう弾を抱えて敵に突撃しろ」

田中「はい」

田中が手りゅう弾を取り出す。

久保「手りゅう弾は無駄に受領してるんじゃないぞ」

宮沢「(左肩を負傷している) 自決しろということですか」

大宮「そうだ。決して、捕虜になるな!」

田中「はい」

田中手りゅう弾を握りしめる。

大宮「それでは、出発する!」

大宮小隊の4人が飛び出して行く。

ダダダーン! ドン、ドン。

銃撃が一層激しくなる。

田中が必死で岩陰に這い寄る。

残された3人。

手りゅう弾を手を持って怯えている田中。

銃撃が少し収まってくる。

関本「生きて虜囚の辱めを受けずか・・・」

宮沢「さすがカミソリと言われるだけあって、先程は凄みがありましたね」

関本「ふん、おだてるな。俺もマラリアでもう長くないから、覚悟はある」

宮本「あの陰険な久保軍曹の怯えた顔は、冥土の土産になりますよ」

関本「俺もあいつが大嫌いだ」

田中「弱い者を徹底的に痛めつける軍曹が、関本上等兵には手を出しませんね」

関本 「関東軍の時、兵舎の裏で、可愛がってやったことがあるんだ」

田中 「そうだったんですか」

関本 「ちよつと起こしてくれ」

宮沢が関本を起こしてやる。

関本 「(苦しそうに)・・・水をくれ」

田中が水筒を渡す。

水を一口飲んで、苦しむ。

関本 「この島には、こんな硫黄臭い塩水しか無いのか。喉が焼けるように痛い。死ぬ前に真水が飲みたい・・・」

ダダダーン (離れた銃撃音)

宮沢 「壕に残られた方が良かったのでは」

関本 「壕の中の野戦病院は、死の待合室だよ。糞尿垂れ流しの悪臭の中で死にたくねえ」

関本が目を閉じる。

宮沢 「砲撃がやんできたな」

田中 「助かった！」

関本 「バカ、逆だよ」

田中 「え！」

関本 「この辺りの日本軍が、全滅したんだ」

田中 「そんな・・・」

ドーン (遠くで聞こえる)

関本 「俺たちは、袋の中のネズミだ。もうすぐ残存兵狩りが始まるぞ」

田中 「(自分に言い聞かすように)敵が来たらこの手りゅう弾を抱えて、敵を撃破する」

宮沢 「どっちみちバタ島守備隊は全滅だ」

田中 「援軍が来れば、反転攻勢だ」

宮沢 「援軍は来ないよ」

田中 「え！」

宮沢 「バタ島守備隊は、大本営に見捨てられたのだ」

田中 「そんなことはない！」

宮沢 「敵がレイテ島に上陸して、この島の戦略的な意味はなくなっている。敵の総攻撃を前に、全軍撤退すれば、よかったんだ」

田中 「なぜ撤退しない」

宮沢 「大本営の参謀どもが無能なんだ。補給計画を無視したこの杜撰な作戦に、始めから撤退の文字はない」

田中 「大本営が守備隊三千を見捨ててるなんて、ありえない！」

宮沢 「アツツ島の玉砕を見ろ！俺達も同じ運命だ」

田中「我が連合艦隊が敵艦隊を撃破して」

宮沢「お前も見ただろ。海上を埋め尽くす大艦隊と、うんかのように日光をさえ遮る無数の戦闘機を」

田中「それを神風が・・・」

ダン、ダン、ダン。(散発的な銃撃音)

宮沢「(首を振って) もう連合艦隊に敵を撃破する力を無いよ」

田中「・・・」

宮沢「俺は、中隊長の当番兵の時聞いたのだ。地区司令部に、援軍、武器弾薬、食糧の補給の要請を拒絶され、それでいて、この島を死守せよとの命令が下された」

ドーン。(遠くから聞こえる)

田中「そんな・・・」

宮沢「玉砕命令だよ」

田中「玉砕、命令・・・だったら、ここで潔く自決します」

田中手りゆう弾の信管を抜いて抱え込む。

宮沢も「わ！」と悲鳴を上げて頭を抱える。

関本も頭を抱えている。

しばらくの静寂。

宮沢恐る恐る顔を上げ、手りゆう弾を抱え込んでいる田中を見る。

宮沢「どうした」

田中「(恐る恐る顔を上げ)・・・不発です」

関本「脅かすな！死ぬかと思った・・・」

田中「申し訳ありません」

宮沢「敵のど真ん中だ。自決しなくても長くは生きられん」

田中「捕虜になるのは、死にまさる恥辱です」

関本「俺たちは、生きて日本には帰れないということだ」

田中「小隊長たちは、どうなるのですか」

宮沢「守備隊本部に行っても、結局一緒さ。小隊長もそのことは知っているよ。だからそんなもの捨ててしまえよ」

田中握り締めていた手りゆう弾を後に投げ捨てる、爆発する。

バーン！(激しい爆発音)

一瞬の閃光。

暗転。

○戦場(夜)

舞台には硝煙(スモーク)が漂っている。薄暗い明かりの中、下手には動かない宮沢たち三人が見える。

上手から中央へ、大宮小隊の四人が注意深く行軍している。

遠くで砲撃の音が聞こえる。

四人とも息が荒い。

久保「攻撃が遠退きましたね」

高橋「敵の包囲網から抜けられたのですね」

大宮「うまく迂回できたようだね。小休止しよう」

大宮の合図で、舞台奥の紗幕前に、四人は腰を下ろす。

伊藤「守備隊本部は、大丈夫でしょうか」

大宮「我々は、命令通り合流することだけ考えればいいんだ」

久保「島全体が、徹底的にやられて、数万のアメリカ軍が上陸してきているんだ。本部がどうなっているか分からない」

高橋「小隊長、いつ援軍は来るんですか」

大宮「分かん」

伊藤「それでは、本部と合流できても」

久保「そうだよ。我々は、全滅するんだ」

大宮「久保！余計なことを言うな！我々の任務は、援軍が来るまで、このバタ島を死守することだ」

久保不満げに顔を背ける。

久保「フン、バタ島守備隊は、お国のために死ねということだ」

三人の視線が、久保を見て、そして、下に落ちる・・・

大宮「・・・」

四人は、黙り込んでしまう。

暗い沈黙・・・

ヒューーッ(まるで花火の様に打ち上がる)

バン！

四人が見上げる。

照明弾が上がり、辺りが昼間の様に、明るくなる。

ドン、ドーン！

砲弾が近くで炸裂する。それを合図に激しい攻撃が始まる。

大宮「敵に発見された！逃げろ！」

ダン、ダン、ダン！

砲弾が炸裂し、銃撃の閃光が激しく交錯する。

銃撃に逃げ惑う兵士たちが登場し、倒れ死んでいく・・・

四人は逃げ惑い、お互いの名前を呼び合いながら、ぼらぼらに闇夜に消えていく。
舞台には、銃撃に倒れた兵士の死体が見える。

○戦場・岩陰（朝）

朝靄の中を朝日が射している。
舞台中央には、死体が見えている。

岩陰から、土埃まみれになった宮沢が這い出してくる。

宮沢「（コホン、コホンと咳き込みながら）」

田中、田中、無事か？」

田中も土埃まみれになりながら、這い出してくる。

田中「ハイ、何とか無事だと思います」

コホン、コホンと咳がする。

宮沢「上等兵、大丈夫ですか」

宮沢が関本の顔を払ってやる。

関本「コホン、俺の顔の周りは砂じゃない。蠅だよ。奴らは俺を死体だと思っていやがる・・・くっそ」

田中「不発弾だと思って投げたら、まさか爆発するとは」

宮沢、岩の裏側を覗く。

宮沢「敵兵が三人死んでいる。あの手りゅう弾の爆発がなければ、確実にやられていたな」

田中「運が良かったのか悪かったのか・・・」

宮沢「そうだな。爆発を合図に始まった攻撃が一晩中続いても、まだ生きています」

宮沢がヘルメットを脱ぐ。

田中「いつそ3人一緒に死ねば楽だったかもしれませんね」

宮沢「ああ、それにしてもどかな朝だな。戦争しているなんて信じられない」

田中「どうして、あの嵐のような攻撃が止んだろう」

宮沢「ちやうど朝食の時間なんじゃないか。アメリカ軍はゆとりがあるよ」

田中がヘルメットを脱ぐ。

田中「はあ・・・腹減った」

宮沢「ああ、水も食料もなく、弾薬もない。いつまで生きられるか」

関本「（顔の蠅を力なく払いながら）・・・すまん、下痢が止まらないんだ・・・」

宮沢「（直ぐに）気にしないで下さい」

関本「何も口にしてないのに、止まらないんだ」

田中「・・・」

関本「体の中の水分が搾り取られて、干からびていくようだ・・・」
関本目を瞑る。

田中「貧乏人で、一等兵の俺でも自決すれば、靖国に行けるかな」

宮沢「この地獄で死ぬんだ。どこへでも行けるさ」

田中「一緒に靖国へ行きましょう」

宮沢「俺は嫌だな」

田中「どうして」

宮沢「俺は、久保軍曹に散々いたぶられた。東京帝大出身だったのが、
気に食わなかったんだろ」

田中「自分も久保軍曹は大嫌いだ。水呑百姓とバカにされ、いつも殴られた。軍隊は嫌な奴が多い。(声を潜めて) 実は、上等兵も苦手なんです。よく殴られました」

関本「(目を瞑ったままで) 体は弱っても、耳は聞こえるぞ」

田中「し、失礼致しました」

関本「俺は、もうお前をバツチ(制裁)する元気もない・・・」

田中「いえ、軍曹に比べたら上等兵殿の方がずっと、ずっと好きです」

関本「フツ、フツ、無理するな・・・俺もお前たちを殴ることで、憂さを晴らしていたんだ・・・」

宮沢「俺は、久保の陰険さが許せない。あいつの顔を思い出すだけでも虫酸が走るんだ。死んでもからあいつと一緒になんか、俺はごめんだね」

田中「やっぱ靖国よりも天国のほうがイイですね」

宮沢「もう生きて日本の土は踏めないな」

田中「もう一度おつかあに会いたいな。弟たちは、元気かな・・・」

宮沢「俺には、許嫁がいるんだ」

田中「会いたいでしょう」

宮沢「ああ、死ぬ前に、一度でいいから思い切り抱きしめたいよ」

田中「どんな女(ひと)なんですか」

宮沢「俺が言うのも何なんだが、原節子に似ている」

関本「プツ(吹く)」

宮沢「(動揺して) 本当なんです。(田中に) 大学の先輩の妹なんだ」

田中「へえ」

関本「一度やらせろよ」

宮沢「(関本を無視して) その先輩が、共産党員でね。憲兵にずっと目を付けられていたんだ」

田中「それで、最前線の部隊ですか」

宮沢「ああ。おれは、大学で、経済学を教えていた。だからアメリカの経済力の凄さは知っていたんだ」

田中「そんなに違うのですか」

宮沢「一人あたりの国民総生産で比較しても倍以上差がある」

田中「倍以上！自分たちはイモも食えない」

宮沢「ろくに資源もない日本の経済力で、大国アメリカに勝てる訳ないんだ」

田中「いや、日本軍は、万世一系の天皇陛下が統率される皇軍です。皇軍一丸となれば、鬼畜米英を必ずや撃破できます」

宮沢「精神力で、物量に勝てるか。イモも食えないで飢えている軍隊が、優雅に朝飯を食っているアメリカ軍に勝てるか」

田中「・・・」

宮沢「ばかげた戦争だ。大学で、日本がアメリカに勝てる訳がないと話したら、憲兵に密告されて、この様だ」

田中「・・・」

宮沢「真実も言えない時代なんだ・・・」

田中「・・・」

関本「えれえ、難しい話だな」

宮沢「すみません。戦場でする話じゃないですね」

関本「いいんだ先生。誰かの声を聞いていたい・・・」

関本が顔の周りの蠅を払って少し顔を起こす。

関本「・・・俺は今年40だよ。妻も娘もいるのに、補充兵でこんな酷い島に送られて来た」

宮沢「上等兵、もうあまり話さない方が良いんじゃないですか」

関本「寂しんだ。それに喋らないと、蠅が口や鼻に入って、息ができない」

宮沢「・・・」

関本「俺には一生の秘密があるんだ。聞きたいか」

宮沢「いえ」

関本「(宮沢を見つめながら、凄む)聞きたいか」

宮沢「いえ(あつさり)」

関本が息を止めて、宮沢を睨みつけている。
苦しそうな関本をしばらく見て、やっと答える宮沢。

宮沢「はい」

関本「ハーッ(息を大きく吐いて)し、死ぬかと思った」

宮沢「・・・」

関本「冷たい奴だな。頼むから聞いてくれよ」

宮沢「はい」

関本「俺は妾の子なんだ」

田中「・・・」

関本「小さい時から、妾の子、ててなしごと蔑まれ、白い眼で見られて

きた」

宮沢「・・・」

関本「俺はお袋を恨み続けた。お袋への当て付けの様に、非行を繰り返して、何度も道を踏み外してきた。その度にお袋は頭を下げ続け、俺にまで謝り続けたんだ」

田中が関本の話の話を聞くために、体の向きを変える。

田中「お母さん、辛かったでしょうね」

関本「うるせい！それでも俺はお袋を許せなかった。やけになって軍隊を志願した時、お袋は、行かないでくれと泣きながら俺にすがったんだ」

宮沢「たった一人の息子ですからね」

関本「ヤクザな息子に、縋り付きながら泣くお袋を見て、俺は初めて気づいたんだ。何て親不孝者なんだと」

宮沢「・・・」

関本「除隊したら、親孝行の真似事でもと心に決めたが、その前にお袋は、あっけなく死んじまった・・・」

宮沢「無念ですね」

田中は、聞いているのが辛い。

関本「ああ、今でもお袋の顔を思い出そうとすると、泣き顔しか浮かばないんだ。とんだ親不孝者だよ」

宮沢「・・・」

田中が涙を拭く・・・

関本「あの頃は、お袋が死んで、命なんか惜しくなかった。でも、今は死ぬのが怖い」

宮沢「誰だって死ぬのは怖いです」

関本「そうじゃない、除隊して、心入れ替えて働き始め、結婚して娘も出来た。お袋の様に、自分も家族を大切に生きようと思った矢先に、望みもしない召集をうけた・・・」

宮沢「それで、この地獄の島ですか」

関本「ああ、皮肉なものだな。生きたいと願った時に、死ぬしかない島で戦わされている・・・先生、俺たちの死は、日本の役に立つのか。娘を守ることになるのか」

田中が関本に、にじり寄る。

田中「我々は、日本の為に玉砕するのです。少しでも本土決戦を送らせるために闘うのです」

宮沢「上等兵・・・そう思わなきゃ、死ねないですよ・・・」

関本「死ぬための戦争か・・・」

田中「死ぬための戦争・・・」

関本「ウツツ・・・」

宮沢 「どうなさったんですか」

宮沢が関本を抱える。

関本 「さつきから、震えが止まらないんだ……」

宮沢 「もう眠られた方が良いのでは」

関本 「いや、眠ればもう起きられない気がする。すまん、もう少し話させてくれ」

宮沢 「はい」

関本 「おやじは西山と言って、高崎で八百屋をやっている。女房に頭が上がない冴えないおやじなんだけど、今度の召集が最後のお勤めになると思っ、娘を連れて会いに行ったんだ。案の定、店先で、おやじの女房に塩掛けられてさ」

宮沢 「ひどいですね」

田中 「(頭を振って)……ひどい……」

関本 「娘には可哀想なことをしてしまった……その時、店の奥から顔だけ出して、手を合わせて謝っているおやじを見て、絶対に許せないと思った……」

宮沢 「……」

関本 「けど、今は許せる気がする、今は何だって許せる気がする……
仏様に近づいたのかな……」

宮沢 「上等兵殿」

関本 「関本と言ってくれ。関本で死なせてくれ」

宮沢 「関本さん」

田中 「関本さん……」

関本 「やつぱり、ここは、地獄だ……」
囁くように「討匪行」を唄いだす。

ひどくまで続く ぬかるみぞ

三日二夜の食もなく

雨降りしづく 鉄かぶと

(討匪行)

静かに聞き入る二人。

関本目を瞑る。

関本がイビキをかき始める。

田中が頭を抱える。

田中 「……小隊長たちは、本隊に合流できたかな」

宮沢 「あの総攻撃の激しさだ。恐らく守備隊本部もやられたんじゃないか」

田中「じゃ小隊長たちは」
宮沢「生きちゃいないだろ……」
暗くなる。

○戦場（夜・月夜）

すぐに上手に明かり。
細い月が見えている。

大宮小隊3人が月明かりの中、上手から登場。3人は、辺りを見
回しながら、注意深く行軍しているが、息は荒い。

舞台中央の紗幕前に、戦闘で亡くなった死体が横たわっている。
下手の岩陰には、動かない宮沢たちが見えている。

久保「（声を潜めて）敵の攻撃は、激しかったですね。もうだめだと覚
悟しました」

大宮「（声を潜めて）皆無事か？」

高橋「伊藤上等兵がいません」

大宮「そうか、やられたか。あの徹底的な攻撃で、我々が生きているの
が奇跡だよ」

久保「この辺りが守備隊本部ですよね」
三人辺りを見回す。

高橋が何かにつまずく。

高橋「わっ！」

大宮「どうした」

高橋「死体が、よく見ると日本兵の死体だらけです」

久保「地獄絵図だな」

大宮「地下壕の入り口も跡形もなくなっている。守備隊本部は、壊滅し
たようだな」

高橋、辺りに目を凝らす。

高橋「岸！」

高橋が戦友の岸の死体を見つけ、抱きかかえる。

高橋「（泣きながら）岸……岸……！」

久保「（冷やかに）知った顔だらけだな」

高橋「我々は、どうすればよろしいんでしょう」

久保「敵を見れば、突撃して行くだけだ」

大宮「食糧も尽きた、弾薬も残り少ない。後は、体当たりするしかある
まい」

舞台下手奥に、かすかに明かりが灯る。

高橋「小隊長、遠くに明かりが見えます」

大宮「うむ、まだ日本兵が生き残っているのか」

久保「守備隊本部が壊滅した今、あの明かりは、敵の可能性が高いので
は」

大宮「ここに留まっても仕方ない。あの明かりを指すぞ」

高橋「はい、日本軍だといいですね」

久保「敵に完全に包囲されているんだぞ。日本軍が、標的にされるよう
なことをするか」

高橋「やはり敵ですか」

久保「あれが我々の死に場所だ」

高橋「・・・」

大宮「よし、行くぞ」

三人、下手奥のかすかな明かりの方向に歩き始める。

三人が下手奥にアウトすると、明かりも消える。

暗くなる。

○戦場・岩陰（月夜）

岩陰に横たわる三人に、月明かりがあたる。

田中「静かですね」

宮沢「ああ、もう守備隊本部もやられたな」

田中「この島の日本軍は全滅だ」

宮沢「残っているのは死体だけだ。我々も明日をも知れない命だ・・・」

田中「宮沢さん・・・自分は、死んでも天国に行けない」

宮沢「どうしたんだ、急に」

田中「初めて中国に上陸した時、目の前で若い中国人が日本刀でバツサ
リ切られるのを見た。その時、飯も食えなくなった」

頭を抱える田中。

宮沢「・・・」

田中「でも、毎日手足の無い死体や、脳味噌が流れている死体を見てい
ると、何とも思わなくなつて、今では、戦友の屍を踏みながら平気
で行軍している」

宮沢「それが戦争だ・・・」

田中「天国はそんなことするところじゃない。俺は、もう天国に行けな
い」

宮沢「お前だけじゃない・・・俺はもつと酷いことをやった」

田中「宮沢さん・・・」

宮沢「俺は・・・俺は・・・抵抗も出来ない捕虜を刺殺したんだ」

宮沢が苦痛に顔を歪め、不自由な手で頭を抱える。

宮沢「あの久保の野郎が、俺が懲罰召集されたのを知っていて、中国人捕虜を銃剣で刺殺せと命令したんだ。恐ろしくて、腰が引けて突けなかった。久保は、そんな俺を後ろから抱え込んで、無理やり生きている人間を刺殺させたんだ。俺はあの時の悲鳴、あの時の肉の裂ける感触、ギシギシと骨に食い込む感触を忘れられない。この不自由な腕をもいで、あの感触を忘れられるなら、こんな腕なんかいら
ない」

宮沢、不自由な腕を叩き続ける。

田中はおぞましさに震えている。

宮沢「俺こそ天国に何か行けない。この地獄から、次の地獄へ行くだけだ」

田中が宮沢を見つめて

田中「中国で酷い事をした我々が、今度はいたぶられ、殺される番になった」

宮沢「因果応報か・・・」

田中「アメリカ軍の激しい攻撃に晒されて、狭い洞穴に逃げ込めば、手りゆう弾を何発も投げ込まれ、かろうじて洞穴の奥に逃げ込むと、今度は火炎放射器で容赦なく焼かれる。戦友はまる焼けです。その時、逃げるに必死で、可哀想とも思わなかった・・・」

宮沢「敵も味方も、人間じゃなくなっているんだ」

田中「この戦争、早く死んだ方が楽なのかも・・・」

二人黙ってしまふ。

深い沈黙。

関本「・・・良子・・・良子」

田中「(声を潜めて) 関本さん、どうしたのですか」

関本「(苦しそうに) 今女房が夢枕に立って、『あなた今生の別れですな』って言ったんだ・・・宮沢、済まないが、俺の背囊の奥にある紙を取ってくれないか」

宮沢が背囊を探って、紙を見せてやる。関本はもう体を動かすこともできない。

関本「宮沢ありがとう。これは、俺の宝だ。5歳の娘が描いてくれた俺の絵なんだ。女房に似た可愛い娘なんだよ。悦子って言うんだ」

関本「この絵、似てるだろ、俺に・・・似てるだろ」

宮沢「はい、とつても・・・」

関本の目からハラハラと涙が落ちる

関本「水も飲んでないのに、涙が出たよ・・・悦子に会いたい、もう一度娘の悦子に会いたい・・・」

関本の両手が空を舞う。

関本「悦子に会いたい・・・良子助けてくれ・・・頼む、助けてくれ」
空を舞っている関本の手が何かを掴もうともがいている。

関本「(意識が混濁している) 帰りたい、帰らしてくれ。何でもするか、もう戦争は止めてくれ」

関本が痙攣する。

宮沢「関本さん」

宮沢が関本の痙攣を押さえようとする。

関本の痙攣が激しくなる。

田中も関本の足元に行つて、関本を押さえる。

関本「あ、今、目の前に、お袋がいる。お袋が泣いている・・・ごめん、お母ちゃん、ごめん・・・俺を許して下さい・・・」

宮沢「関本さん・・・(泣きながら関本を抱きしめる)」

田中「上等兵殿、お気を、お気を確かにお持ちください」

関本「神様、仏様、天皇陛下様、お願いします。どうか私を日本に戻してください。悦子に会わせて下さい・・・」

宮沢「・・・」

関本「神様、仏様、大日本帝国様・・・お願いします・・・お願いします・・・」

目を見開いで、苦悶の表情で、もがき続ける。

関本「・・・どうか、どうか・・・私を日本に、日本に・・・戻して・・・」

もがき続ける関本を悲痛な思いで見つめる二人。

関本の両手が落ち、静かになる。

田中「上等兵殿！」

田中が関本を揺するが反応がない。

宮沢が、蠅を払って目を閉じてやる。
二人が亡くなった関本を見つめる。

宮沢が娘の絵を、関本の手に乗せる。

田中「あっけないですね・・・」

宮沢「戦場で鬼の様に闘って、カミソリと恐れられた上等兵が、マラリアであっさり死んじゃったよ」

田中「最後まで娘に会いたがって、かわいそうでした・・・」

宮沢「無念だろうな・・・」

田中「自分も日本に帰りたい・・・」

宮沢「俺も帰りたい。でも玉砕の島からの生還は許されない。俺たちは死ぬしかないんだ・・・」

悲痛な二人。

宮沢「関本さんを野に晒す訳にいかない。ここに埋葬しよう」
田中「はい」

二人は、不自由な体を使って、岩の下を掘り始める。
そこに関本が唄う「討匪行」が流れる。

〜どこまで続く　ぬかるみぞ

三日二夜の食もなく

雨降りしづく　鉄かぶと

暗転。

○戦場（月夜）

細い月が出ている。

舞台中央に、薪が燃えている。

村人の玉城優作、宮里剛、知念信明が、薪を囲み、焼いたイモを食べている。

大宮小隊の三人が、舞台の上手から、警戒しながら登場。

薪にあたっていている三人に慎重に近づく。緊迫感がある。
戦闘態勢を取り、今にも銃撃しそうである。

彼らが食べているのを見て、三人ともごくりと喉を鳴らす。
高橋のお腹がグーと鳴る。

久保「(声を潜めて) バカ! 気づかれたらどうする」

久保のお腹もグーと鳴る。

久保「相手はまだ気づいていません。一気にやりましょう」

高橋「日本人のようですが」

久保「こんなところで、のんきに食っている奴が、日本兵であるはずがない。やりましょう。そして食糧を奪いましょう」

高橋「日本人だったら」

久保「敵でも味方でも構わねえ。俺たちはどっちみち死ぬんだ。腹ペコで死にたくない」

大宮「いや、確認しよう」

三人は、気づかれないように、ぎりぎりまで薪にあたっているに
村人三人に近づく。

大宮「手を上げろ!」

三人は、銃を構え村人三人を取り囲む。

村人は、キョトンとしている。

大宮「ホールドアップ!」

村人は顔を合わせて戸惑っている。

三人は銃で威嚇しながら村人を立たせる。

大宮「日本語は分かるか?」

玉城優作「わしらは、日本人だよ」

久保「日本人の振りをしたスパイかもしれません。日本兵はこんな恰好
をしない」

大宮「貴様らの所属を言え」

宮里剛「俺たちは兵隊じゃねえ」

久保「(今にも撃ち殺さんばかりに) この島に民間人はいない」

玉城「何言っているんだ。わしらは、あんたらの部隊より前からいる」
知念「そうだ、飛行場設営隊として、沖縄や朝鮮から連れて来られたん
だ」

三人は、村人に銃を向けながら相談する。

久保「信用できません。やりましょう」

大宮「待て。(村人に) 設営隊は、撤退したのではないか」

玉城「一次撤収で置き去りにされた」

宮里「それから輸送船は来ない。全部敵の潜水艦にやられたよ」

大宮は、銃を下げて村人に近づいて尋ねる。

大宮「どうしてここにいる」

玉城「わしらの村は、飛行機では見えねえ谷底にあるんだ。夜に火を使えねえ」

大宮「この島に、そんな村があるのか」

知念「わしら設営隊は、この島を知り尽くしているんだ」

宮里「だから敵の激しい空襲で仲間が大勢死んだ時、村に逃げこんだんだ」

久保「どうしてその場所を報告しなかった！守備隊は、全滅したんだぞ」。

玉城「フン、何言っているんだ。あんたらは、この熱帯の島で作業をさせるだけさせておいて、まともに食糧もくれなくなった。だから密かに、村でイモを作ってわしらは何とか生きのびてきたんだ。どうしてその場所を教えられる」

久保「この非国民が！」

久保が銃を構えて撃とうとする。

村人は、怯えている。

大宮「止めろ！民間人を撃ってどうする」

久保「しかし、こいつらのために守備隊が」

大宮「守備隊は、敵の攻撃でやられたんだ。敵の掃討作戦が開始されれば、その村もいずれ発見される。結果は一緒だ」

久保「・・・(銃を下す)」

村人が薪の所に戻る。

高橋「頼む。イモを分けてくれないか」

玉城「いいだよ。ほれ」

村人が高橋に焼けたイモを渡す。

久保「(偉そうに)俺にもくれ」

村人が久保と大宮にも渡す。

大宮「すまん。有り難く頂こう」

三人は、薪の周りにすわり、貪り食う。

高橋「ごぼ、ごぼ(急いで食べたのでむせる)」

大宮「(笑いながら)ゆっくり食べろ」

久保「イモがこんなに美味しいとは思いませんでした」

高橋「(一息ついて)生き返った気がします」

和やかな空気になる。

大宮「最後の食事で、生涯一番美味しいものを食べられた。(村人に
本当にありがとう)」

大宮が村人に頭を下げる。

玉城「そう言ってもらうと、嬉しいな。おい」
宮里「そうだな」

村人も嬉しそう。

高橋「美味しいイモを食べると故郷(くに)を思い出します」

大宮「故郷(くに)はどこだ」

高橋「水戸であります」

大宮「イモは水戸の名産か？」

久保「名産は、納豆じゃないのか」

高橋「納豆も美味しいですが、水戸の『乾燥芋』は絶品であります」

大宮「乾燥芋？干し芋のことか」

高橋「水戸じゃ乾燥芋といいます。焼くと一味もふた味も変わるんであります(ごくりと喉を鳴らす)」

宮里「そんなにうまいのか」

高橋「そりゃもう、周りがかリカリで、中がしっとりして、甘さが増すだっぺ」

大宮「うまそうだな」

久保「高々イモじゃねえか」

久保そう言いながらイモを食べる。

高橋「(久保を無視して)平干しと丸干しがあつて、自分はやっぱり丸

干しが好きです」

大宮「丸干し？」

高橋「はい。小ぶりのイモをそのまま時間を掛けて天日干したのが、丸干しなんです。これがまた甘みが強くって、美味いだっぺ」

宮里「へえ、丸干しを食ってみたいな」

知念「わしも食ってみたい」

久保「フン、イモに変わりはないだろ」

高橋「とんでもないだっぺ。イモの種類によって味は皆違うだっぺ。故郷じゃみな自分の好みの種類のあつて、『玉豊(たまゆたか)』が定

番だけど、自分は深い味わいのある『いずみ』が、すきだっぺ」

高橋は、いずみの美味さを思い出し、溜息をつく。

久保「何がだっぺだ！何が深い味わいだ！そんなのは関係ない。俺らは

もうすぐ死ぬんだぞ。屁もこけなくなるんだぞ！」

高橋「・・・」

大宮「死ぬ前に好きな食べ物の話もいいじゃないか。死刑囚だって、死ぬ前に好きなものを食べるだろ」

久保「話だけじゃ死刑囚以下だな」

大宮「久しぶりだよ。美味しいイモを食って、好きな食べ物の話をするのは。でもこれが最後だな」

高橋「小隊長は、何がお好きなのですか」

大宮「コメだよ」

高橋「やっぱり熱々のご飯ですね。日本人ですもの、当然ですね」

大宮「俺の末期の食べ物は、冷たいご飯だ」

高橋「え！冷たい？」

大宮「ああ、俺の田舎は、山形の尾花沢なんだけど、昔から『水かけごはん』があつてな」

高橋「水かけごはん？」

大宮「ああ、冷やごはんを水で洗って、ぬめりを取って、それに冷たい水を掛けて食うんだ」

高橋「冷たい水を掛けるだけですか」

大宮「ああ、子供の時から食っている。俺にとっては、懐かしい故郷の味なんだ」

高橋「熱々のご飯より美味しいんですか？」

大宮「冷たい水の中に潜む冷たいご飯を噛むと、微かな、甘みを感じるんだ。その甘みに、じつと耳を澄ませると幸せな気持ちになってくる・・・そして、噛めば噛むほどその甘みが強くなって来るんだ。それが米本来の美味さなんだ」

高橋「自分も食ってみたいであります」

知念「『水かけ』はん」なんて、初めて聞いたな」

宮里「ああ、沖繩じゃ中々米は食えないけど、食べてみたいな」

玉城「わしは、やっぱり『ラフテー』が食いたい」

宮里「ラフテーか、食いたいな！」

高橋「ラフテーって何ですか？」

知念「豚の角煮さ」

久保「豚（ごくん）と喉を鳴らす」

玉城「甘辛く味付けて、一晚コトコト煮込むと、箸で切れるくらい柔らかくなるんだ。見た目は、脂っぽく見えるが、意外とあっさりしていて、口の中に入れるとふわっととろけて、肉の旨みが広がる・・・たまらない美味しさだ」

知念「泡盛で煮込むと贅沢な美味さになる。そばに入れても良いし、酒の肴にしても最高だ」

高橋がごくんと喉を鳴らす。

大宮「美味そうだな」

久保「・・・(何か言ってる。息が荒い)」

宮里「わしは、テレビチがいい」

高橋「テレビチ？」

知念「豚足だよ。これも煮込んで」

久保「許せん！許せん！」

大宮「どうした？」

久保「イモや米なら、我慢も出来たが、もう肉となると、我慢ならねえ！(凄む)」

久保が銃を持って立ち上がる。

大宮「久保！（立つ）」

久保「沖繩の角煮野郎！こんな奴ら生かしておいても碌なことはない。今殺ってしましましょう」

大宮が久保の銃を押さえる。

大宮「貴様は、恩を仇で返すのか！」

久保「戦場で、恩も仇もねえ。生きるか死ぬかだ(目が血走っている)」

大宮「落ち着け！（一喝する）」

久保が大宮を見る。

久保が荒い息を整える。

久保「すみません。腹が減って、こいつらの話を聞いていると、頭がクラクラしてきて(座る)」

大宮「(見下ろして) 軍人なら自分を見失うな！」

久保「・・・」

高橋「軍曹(取り成すように) 軍曹どのは、何が一番食べたいですか」

久保「それを言ったら、お前が食べさせてくれるか」

大宮「久保、何か言えよ(座る)」

久保「(少し不貞腐れて)・・・『鱧皮(はもかわ)ちくわ』は、夢に出てきます」

大宮「鱧皮ちくわ？」

久保「ええ、仕事で阿波にいる時よく食べました。肉厚の鱧の皮を竹に巻きつけて、炭火で炙ったものなのですが、香ばしくて、歯応えがあつて、噛めば噛むほど旨味が出てくるんです(ごくんと喉を鳴らす)」

高橋「よだれが出ますね」

玉城「うまそうだな」

村人が寄って来る。

久保「(調子に乗って来て) そりゃごつい美味しいぞ。スタチをかけりやあ、もう最高の酒の肴ぞ。毎日だつて食べる。いや食いてえ。(益々調子に乗って来て) わいは、鱧皮ちくわ三本あれば、一升は呑めるぞ」

高橋「え！一升も」

久保「一升なんて、軽いもんど」

宮里「泡盛でも行けそうだな」

久保「酒だったら、何でも合う！鱧皮ちくわを一口かじって、『勢玉(せいぎよく)』を冷で、クーツと煽ったらたまらんど。そこで、小粋な女将に酒を注いでもらったら、わいは、その場で死んでも悔いはねえ！ええい、酒呑みてえ、鱧皮ちくわ食いてえ！ええい、余計腹が空いてきたぞ。堪らんど！堪らんど！」

久保が立ち上がって、村人に銃を向ける。

久保「どれー(この野郎) もつとイモを出せ！持っているだけイモをだせ！出さなきゃ本当に撃つぞ」

村人三人手を挙げて、怯えている。

宮里「撃たないでくれ」

玉城「もう持っていないんだ」

久保「嘘つけ！」

大宮「久保、止めろ！同胞だぞ」

久保「同胞だろうと、民間人だろうと関係ねえ！俺たちはもうすぐ死ぬだ。その前に腹いっぱい食いたいんだ！ええ、面倒だ！殺っちまおう」

久保銃を構えて、狙いを付ける。

村人たち「ヒエーッ」

大宮「止めろ！この馬鹿者！」

大宮が久保を殴りつける。

久保が倒れ込む。

大宮「お前は、日本軍の恥だ！」

久保は切れた唇の血を手で拭いながら、顔を背ける。

久保「ケツ、学徒上がりが偉そうに」

高橋「小隊長殿」

高橋は、ホツとして、大宮を見ている。

大宮「申し訳ありませんでした」

大宮が村人に深く頭を下げ、詫びる。

玉城「あの勢いで本当に撃たれると思った」

知念「生きた心地がしなかつたな」

宮里「ああ、怖かつたよ」

大宮「怖い思いをさせて、申し訳なかつた」

玉城「もういいよ。戦場だから、何があっても仕方ない」

知念「そろそろ帰るか」

宮里「そうだな。夜が明ける前に村に着かないとまずいからな」

村人が帰る準備を始める。

大宮「(村人に) 厚かましいが、もう少しイモを分けてくれないか。頼む」

大宮が村人に頭を下げる。

高橋は土下座している。

久保も立ち上がる。

久保「サッサと出せ」

玉城「本当じゃないんだ」

宮里「でも、村に帰ればあるよ」

久保「その村に案内しろ」

玉城「だけど・・・」

大宮「すまん。ほかに行くところがないんだ。頼む。案内してくれ(頭を下げる)」

高橋も頭を下げている。

玉城「わかつたよ」

村人が薪の火を消す。

真つ暗闇になる。

舞台の上は何も見えない。声だけ聞こえる。

高橋「ま、まったく見えません」

久保「足元を照らせ！」

宮里「明かりを付けて帰ると、村が見つかってしまう」

玉城「わしが先頭で、案内するから一列になって前の人の服を掴んでつ

いて来てくれ」

大宮「分かった」

玉城「じゃ、出発するよ」

真つ暗闇の中、6人は歩き始める。

久保「(声を潜めて)おい、まだか」

知念「村の近くで薪は、できんさ」

宮里「この道なんか昼間なら怖くて歩けねえ絶壁の道だよ」

高橋「ヒッ！ホントだ。足の横に道がない」

玉城「足を踏み外さないように、前と距離詰めて、小さく歩くんだけ」

緊張の沈黙の中、時折「ヒッ！」「ハッ！」「ヒュッ」の音が聞こえる。

その声が次第に遠くなる。

ラジオの音が被ってくる。

ラジオの音「ピー、ピー、大本営発表ー、9月29日、バタ島守備隊・

大山守備隊長は、状況の推移を達観し、最後の決断を致しました」

村人たちが、下手にアウトすると、完全な暗闇。

ラジオの音「それは、敵に大鉄槌を下し、皇軍の真髓を發揮せんというのであります。

大山守備隊長は、ただの一度も兵の増援を要請せず、また一発の弾薬の補給をも願ってまいりませんでした。

バタ島守備隊の我が部隊は、遂にことごとく玉砕いたしました」

○戦場・岩陰

暗闇。

その暗闇の中に、薄っすらとした明かりが、舞台下手に見え始める。

その明かりの中に宮沢と田中が、岩にもたれ掛っている。

宮沢「・・・おい田中」

田中「はい、まだ生きています・・・」

宮沢「厳寒の満州からこの南国の島に転進してから、たった3か月だよ」

田中「あっけないですね・・・」

宮沢「輸送船から降りた時、空や海、椰子の木を見て、原色の世界に圧倒された。生きていることに、感動したんだ」

田中「美しい朝焼けや夕焼けを見て、涙が出ました」

宮沢「この世の天国かと思ったよ」

田中「でも、炎天下の地下壕掘りは、地獄だったです……」

宮沢「まともな水が飲めないのが一番こたえたよ」

田中「この3日なにも食っていないので、飢え死にしそうです」

宮沢「われわれの命も、風前の灯だなあ」

田中「生きてるのが、不思議なくらいです……」

宮沢「それにしても、アメリカの攻撃は凄まじかったな」

田中「地下壕の中でも生きてきた心地がしませんでした」
宮沢「こんなちっぽけな島に、空を埋め尽くす戦闘機から雨のように爆弾を落とされ、海を覆い尽くす戦艦から容赦のない艦砲射撃を受けた。大きな岩が吹き上がり、山が崩れ、島の形が変わってしまった」

田中「島全体が、嵐の中の小舟のように揺れていましたね」

宮沢「ああ、そして仕上げは、爆撃機から焼夷弾を繩のれんのように落とされ、焼き尽くされた。天国の島が禿山と岩だらけの島になっちゃった」

田中「それから、数万ものアメリカ兵の上陸ですものね」

宮沢「圧倒的な兵力で我々を弄んでいるとしか思えない攻撃だったな。くっそ！」

田中「三か月よく持ち堪えましたね」

宮沢「そうだな。まさに奇跡だ」

田中「日本では、どのように伝えられるのでしょうか」

宮沢「今頃、大本営は、見捨てたにもかかわらず、戦意高揚のため『玉砕』したと囃し立てるだろ」

田中「玉砕……美しい言葉ですね」

宮沢「ああ、この凄惨な全滅が、美しい玉が砕け散るように全滅したと伝えられるんだ。俺達の死が美化され、軍神と崇められ、また多くの若者をこの戦争に引きずり込む手段とされる」

田中「軍神」

宮沢「俺達二人は、生きながら神様にされちゃたんだよ」

遠くで何か聞こえる。

田中「何か聞こえます……」

段々大きくなる。

宮沢「相馬盆唄だ」

〜ハアイヨ〜

今年や豊年だよ
穂に穂が咲いてヨ
ハア道の小草にも
ヤレサヨ米なるヨ

宮沢「バカにしやがって！相馬盆唄を流して残存兵狩りか！」
田中「でも、何か・・・故郷（ふるさと）の利根川村を思い出します・・・」

『相馬盆唄』にラジオの音がかぶる。

ラジオの音「ピー、ピー、大山守備隊長以下2800人のバタ島守備隊は、一兵たりとも虜囚の辱めを受けず、軍神となったのであります」

○村葬（栃木の利根川村・田中の出身地）

村人たち「（口々に）田中上等兵万歳！」

舞台の紗幕の奥が明るくなり、軍神となった田中上等兵（死後昇進）の村を挙げての葬儀が行われている。

『剛毅院玉碎中山義烈清居士』

舞台下手には、死体のように横たわる二人が薄らとした明かりの中に見えている。

舞台上には、二つの明かりがある。

村人たち「（口々に）田中上等兵万歳！田中上等兵万歳！」

村人たちは、哀しむより、村から軍神が出たことを喜んでいる雰囲気。

紗幕の前に、上手から田中の父母が登場する。

田中よね「どうして、和彦の葬式で、皆が万歳するんですか」

田中三郎「声が大きいぞ」

田中よね「まるで村祭りじゃないですか。和彦の戦死がそんなに嬉しいんですか」

田中三郎「名誉の戦死だからな」

田中よね「名誉の戦死？死んでしまったら、何にもならない・・・」

田中三郎「畏れ多くも天皇陛下から有難いお言葉まで頂いた。この上ない名誉だ」

田中よね「そんなお言葉よりも、わたしは和彦を還してほしい！和彦！

(母の叫び)

田中三郎は、慌てて回りを見て、母親の口を押える。

田中三郎「しっ！皆に聞こえたら大変だぞ」

よねが、三郎の手を払いのける。

田中よね「母親が息子を呼んで何が悪いのよ！和彦！和彦！」

三郎が、よねを殴る。崩れるよね。

田中三郎「取り乱すな！和彦の名誉を汚すんじゃない！」

田中よね「可哀想な和彦・・・あの子には、ずっと苦労ばかりかけた。

小さい時から弟たちの面倒を見させ、いつもひもじい思いをさせて来た・・・」

田中三郎「小作人だから、仕方ない・・・」

田中よね「せめて、せめて、もう一度あの子をこの手で抱き締めてあげたい。和彦・・・和彦・・・」

よねが和彦を抱きしめる様に、小さくうずくまっていく。

○戦場・岩陰

舞台下手で、横たわっていた田中が、頭を持ち上げ、不自由な体で、母を捜す。

田中の動きに気付いた宮沢。

宮沢「どうした」

田中「・・・今名前を呼ばれた気がしたんです」

宮沢「はあ(溜息)、周りには誰もいない。悲しいほど静かだ」

田中「ええ、でも確かに和彦と呼ばれたんです。おっかあに」

田中の『おっかあ』が聞こえたように、上手のよねが反応する。

宮沢「こんな日本から何千キロも離れた南海の孤島で、母の声が聞こえるなんて、俺たちの命もそう長くないな」

田中「もし生きて帰れたら」

宮沢「(田中を遮って) 田中！玉砕の島からの生還はないんだ。もう俺たちに生きる場所はない」

○村葬

田中三郎は、周りが母親の言動に気づいていないのに安心する。

田中三郎「村を挙げて、喜んでいいるんだ。たとえ軍神和彦の母親でも言

葉には気を付けろよ」

田中よね「わが子の死を喜ぶ母がどこにいる」

田中三郎「あいつは、立派に戦って、名誉の戦死をし、見事に軍神となったんだよ。田中家の誇りだ。いや今やこの利根川村の誇りなんだ」

田中よね「軍神？そんなものにならなくていい。生きて帰って来てほしい（切ない叫び）」

田中三郎「諦める。バタ島守備隊は、玉砕したんだ。全滅したんだよ」

田中よね「いや、あの子は生きている。私には分かる」

田中三郎「遺骨も帰って来たじゃないか」

田中よね「何が遺骨よ。入っていたのは砂じゃない。あの子はきつと帰ってくるわ」

田中三郎「軍神が生きて帰ってきたら、どうなる」

田中よね「？」

田中三郎「神様になったら、もうこの村に帰る場所はねえ。帰れるのは靖国だけだ……」

田中よね「そんな……」

田中三郎「あいつのお蔭で、水飲み百姓の俺たちが、誉（ほまれ）の家、軍神の家族と呼ばれ、村の英雄になった。この村でこんなに大切にされたことがあるか。今までの酷い扱いを考えたら、天国だよ」

田中よね「（独り言のように）あの子は生きている……」

田中三郎「もう和彦が生きていようと、死んでようと関係ない。あいつは軍神になっちゃったんだ」

田中よね「……」

田中三郎「考えてみる。もし和彦が、捕虜になって帰ってきたらどうなる。今万歳をしているあの村人たちがどうすると思うか」

万歳している村人たち（無音のシルエット）。

田中よね「……」

田中三郎「皆が白い目で、わしら家族を見るぞ。非国民と蔑みながら。

この村で和彦は暮らせない。それだけじゃない。わしらの居場所すらなくなってしまうぞ」

田中よね「……」

田中三郎「和彦は、生きて帰って来ても、もう生きる場所はないんだ！

」

田中の母がワツと泣き崩れる。

舞台上手と紗幕の奥が暗転し、下手の岩陰だけが見えている。

母の泣き声だけが聞こえる。

残された闇。岩陰の二人。
母の嗚咽が次のシーンも続いている……

○戦場・岩陰

田中「やっぱり、おつかああの泣き声が聞こえる……」
宮沢「田中、しっかりしろ。それは、幻だ」
田中「幻でもいい。おつかあに会いたい……」
宮沢「そうだな、死ぬ前にもう一度会いたい、母に会いたい……」
田中「おつかあ……(哀しい叫び)」
宮沢「お母さん……」

暗転。

○戦場

暗闇の中に、青白く光る蝶の群が現れる。

大宮たちが上手から登場する。

高橋「何か青白く光るものが見えます」
久保「人魂じゃないのか。気持ちが悪いな」
大宮「いや、綺麗だ。幻のようだ」
知念「あれは、蝶の群だよ」
高橋「蝶が、あんなに美しく群れているんですか」
宮里「この島で生まれた蝶たちが、この時期『蝶の谷』に集まって来るんだ」
高橋「蝶の谷？」
玉城「ああ、われわれの村だよ。この蝶たちが村へ連れて行ってくれる。もうすぐだ」
知念「色んな色の蝶が、谷に集まって来て、本当に綺麗だよ」
玉城「あの青白く光る蝶は、沖繩にもいるマダラ蝶の仲間だよ」
大宮「マダラ蝶？」
玉城「ああ、夜明け前にこの谷で孵化して、大群で、海を渡るんだ」
皆、蝶の群を見つめている。
蝶の群れが大きく動き、皆がその動きを見つめている。
大宮「海を渡るのか……」
玉城「数百、数千の群れを作って、何千キロも移動するんだ」
次第に夜が明けてくる。

大宮「夜が明けてきたようだな」
宮里「村に着いたよ」

皆が振り返る。

舞台の紗幕が上がっている。
紗幕奥の朝靄に霞む谷底には、村葬の時の建物から葬儀部分を除いた粗末な小屋が見える。沖繩の建屋のように奥まで見通せる風通しの良い作り。

三人は、銃を構えて用心深く村に入っていく。
一人の男が近づいてくる。

宮里「村長です」

上原村長が丁寧に頭を下げる。

上原村長「ようこそお出で下さった」

大宮「ありがとうございます。休息を取ったらご迷惑を掛けない様に出
ていきます」

村長「まあ、大変な激戦だったから、お疲れでしょう。とりあえずゆっ
くりお休みください」

村長が三人を舞台中央の小屋に案内する。

村長「ここをお使下さい」

大宮「ありがとうございます。（久保、高橋に）休ませてもらおう」

大宮の合図で、三人は小屋に上がり、銃を置き、ヘルメットを脱
ぐ。

村長「この村は、深い谷底なので、アメリカ軍に見つかっていません。
安心してお休み下さい」

大宮「助かります」

一同村長に頭を下げる。

小屋の周りでは、玉城など村人が荷物を運び始めている。
その中に、村人と同じ作業着を来た伊藤上等兵もいる。

伊藤が大宮たちに気づく。

伊藤「小隊長！」

大宮「伊藤！生きていたのか」

三人が伊藤の周りに集まってくる。

高橋 「よくぞ御無事で（涙ぐんでいる）」

久保 「貴様のことは、もう諦めていたんだ」

伊藤 「自分ももうだめだと覚悟しました。夢中で逃げ回って、途方に暮れていると、青白く光る蝶の群がこの村に連れて来てくれたんです……」

村長 「夜中に、迷って来られました」

大宮 「無事でよかったな」

大宮が伊藤の肩を抱きしめる。

伊藤 「少しでも村の役に立とうと農作業を手伝っておりました」

久保 「お前、敵前逃亡で死刑になるぞ」

伊藤 「慌てて否定する）自分は迷って、この村に来たんです。逃げた訳じゃありません」

大宮 「伊藤、バタ島守備隊は、全滅した」

伊藤 「全滅！」

大宮 「ああ、だから我々の帰る部隊はない」

久保 「我々に残された道は、敵に突撃して死ぬだけだ」

大宮 「生きて虜囚の辱めを受けず、一兵残らず玉砕して、皇軍の真髓を敵に見せつけるのだ」

伊藤 「自分は……」

大宮が伊藤の言葉を遮る。

大宮 「まあいい。せつかく生き残って集まったんだ。休息を取ってから、話をしよう」

伊藤 「はい、自分は作業に戻ります」

村長 「それでは、後程参ります」

大宮 「お世話になります」

村長と伊藤が去る。

大宮 「会えてよかった」

高橋 「自分もうれしいであります」

久保 「ここで会えても、助かるわけじゃない……」

大宮 「とにかく疲れた。休もう」

三人その場で横になり、直ぐに眠りに入る。

時間が経過して、夕景。

大宮が起き上がる。

大宮 「おい、起きろ！もう夕方だぞ」

高橋が起きる。

高橋「こんなに寝たのは久しぶりであります。体の中にあつた重石が消えた気がします」

大宮「そうだな、体が軽いな」

久保「(起き上がりながら)ああ、よく寝たな。(周りを見ながら)それにしては腹がへつたな」

村長と、伊藤がイモを持って、登場する。

村長「皆さん、やっとお目覚めですか」

大宮「よく眠れました」

高橋「あの激戦の後に、こんな気持ちのいい眠りがあると信じられませんか」

村長「それは、よかった」

久保が伊藤の持っているイモを見て

久保「そのイモは？」

伊藤「村長からです」

伊藤がイモを差し出す。

大宮「(村長に)ありがとうございます」

村長「この村には、イモしかありませんが、召し上がって下さい」

大宮「有り難く頂こう」

三人がイモを食べる。

村長「ごゆっくりお休み下さい」

村長が去る。

久保は、黙々とイモを食べている。

伊藤「小隊長殿、自分は軍人を捨てます」

久保がイモを食べるのを止め、伊藤に近づく。

久保「貴様それでも大日本帝国軍人か！」

久保が伊藤を殴る。

久保「貴様は、死ぬのがそんなに怖いのか！」

伊藤「(立ち上がった)怖いであります」

久保「この臆病者！」

伊藤に再び殴りかかろうとする久保を大宮が止める。

大宮「守備隊本部は、全滅した。我々に残された道は死ぬことだけだ。

最後は、軍人らしく死のう」

伊藤「もう殺す、殺されるなんてまっぴらです。自分は人間らしく死に

たいであります」

久保「何が人間らしくだ。我々は、戦場で軍人をやめることはできない」

大宮「伊藤、気持ちちは分かる。しかしこの村に我々がいると、村人に迷惑がかかるぞ」

伊藤「この村が発見されれば、自決します」

高橋「（意を決したように）自分も村が発見されるまで、村に留まりたいであります」

久保「貴様まで！」

久保が高橋の胸ぐらを掴み、殴りかからんとする。

大宮「止めろ久保。我々もこの村で暫の休息を取ろう。死ぬのはそれからでも遅くはないだろう」

久保「・・・」

大宮「伊藤、お前はどの村で何をするんだ」

伊藤「は、この村で商売しようと思っております」

大宮「商売？」

伊藤「わたの母の実家は、大阪の船場で商売をやっておりますねん。こんな村でも商売人の血が騒ぎまんねん」

高橋「どんな商売ですか？」

伊藤「あんたら一日働いて、イモ二本でどないだ」

高橋「イモ二本？」

伊藤「そうや。何か食べんと生きていかれへんやろ。働かんもの食うべからずや。わたが村長と交渉しますわ」

久保「お前は交渉だけか？」

伊藤「そんなん商売になりまへんがな。あんたらのイモのへたを、手数料に貰いますねん」

大宮「へた？」

伊藤「そのへたを集めて、焼酎を作つて、村人のイモと交換しますねん」

久保「焼酎かあ」

高橋「干しイモを作るのはどうですか」

伊藤「それもええな」

久保「そんなセコイ商売を考えやがって、それでも貴様帝国軍人か！」
久保が伊藤の胸ぐらを掴む。

伊藤「すいまへん、すいまへん。セコイ商売で」

久保「罰として」

伊藤「え、罰でつか」

久保「そうだ。罰として、最初の一杯は俺に飲ませろ」
緊張が一瞬にして緩んで、笑いが起きる。

大宮「いい罰だな。俺も乗せてくれ」

高橋「自分も乗せて頂けますか」

伊藤「そんなんしてたら、商売になれへんわ」
一同どっと笑う。

大宮「久しぶりに笑ったな。もう夜になるから、早速明日から働こうか」

伊藤「ほんなら、今から村長と交渉してきますわ」

伊藤が走り出す。

伊藤「村長！」

暗転。

○島の村（数日後・昼）

家の前で、大宮たちが働いている。
柱などを運び、家を補強している。

大宮「おい、少し休もうか」

高橋「はい」

大宮と高橋が汗を拭きながら、家の床に腰掛ける。

久保・伊藤も大宮たちのところへ来る。

久保「疲れたな」

高橋「自分にとっては、気持ちいい疲れです」

久保「ふん、疲れに気持ちいいなんてあるのか」

伊藤「そりやあります。地獄の戦場を這いずり回る疲れは最悪でんな」

久保「それが軍人の本分だろ」

大宮「こうして働くのは本当に気持ちいい。」

この村にいと、戦場にいることを忘れるなあ」

高橋「このままずっと、この村が見つからなければいいですね」

伊藤「それは無理というもんや。敵の本隊が上陸してきたら、この谷もこの村もあつという間に見つかってしまいますがな」

高橋「・・・」

大宮「我々は、もうすぐ村を出よう。我々がいなければ、敵も民間人まで殺さないだろう」

高橋 「そうですか・・・」

久保 「貴様、怖気づいたか！」

伊藤 「誰でも死ぬのはいやや」

久保 「なに！（気色ばむ）」

大宮 「（久保を制して）後は、恩を受けた村人に迷惑を掛けないように、立派に死のう」

高橋 「はい！」

大宮 「それじゃ、作業を再開しようか」

四人が作業を始める。

そこに村長が、今岡中佐を連れてくる。

村長 「皆さん、今しがた、このお方が谷に迷って来られた」

四人が、今岡の前に整列し、直立不動で敬礼する。

大宮 「今岡連隊長、ご無事でしたか」

今岡 「貴様らは、この谷に逃げてきたのか」

大宮 「自分たちは、守備隊本部に合流しよと致しましたが、本部が全滅したため、この村に迷い込みました」

今岡 「そうか」

今岡が四人をじろつと見る。

一人作業着姿の伊藤の前に行く。

今岡 「貴様なんという」

伊藤 「伊藤上等兵であります」

今岡 「その恰好はなんだ」

伊藤 「自分は、軍人を止めようと思いましたが」

今岡が伊藤を殴る。伊藤倒れる。

今岡 「馬鹿者！貴様は敵前逃亡だ。処刑する」

今岡が伊藤に銃を向ける。

伊藤 「ひゃッ！」

大宮が伊藤の前に立つ。

大宮 「連隊長！我々はこの村を出て、敵に突撃する相談をしております。伊藤上等兵も同行させてください。名誉の戦死をさせてください」

今岡 「分かった。突撃するのは一人でも多い方がいい」

大宮「ありがとうございます」

今岡「それでは、中尉。お前がこいつの性根を叩き直してやれ」

大宮「え！（一瞬躊躇する）」

今岡「この軟弱者め！」

今岡が大宮を押しつけ、伊藤を殴る。

伊藤が殴られているのを痛ましく見ている大宮、高橋。

村長は、見るに見れない。

久保は、にやにやして見ている。

今岡の息が上がる。

今岡「かわれ！」

久保がにやにやしながら、伊藤を殴り始める。

久保「この大阪野郎！俺は元々虫が好かなくなったんだ」

久保が、倒れた伊藤を蹴り続ける。

大宮「止めろ！それ以上やると死ぬぞ」

今岡「もういいだろ。（久保に）骨のある奴だな」

久保「はあ、はあ、と息を切らしながら」ありがとうございます」

大宮「伊藤！」

大宮と高橋が倒れて呻いている伊藤に駆け寄る。

高橋「上等兵、大丈夫ですか」

高橋が伊藤を抱き起すが返事はない。

今岡「おい、お前の名前は？」

久保「はい、久保軍曹であります」

今岡「よし、軍曹」

久保「はい！」

今岡「今からここに村人を集めろ」

久保「はい！」

久保が村長に向き直る。

久保「村人を集めるぞ」

村長「な、何をなさるのですか（動揺）」

久保「貴様がそんなことを知らなくてもいいんだ！来い！」

久保が村長を連れて去る。

大宮立ち上がって、今岡に近づく。

大宮「連隊長。村人を集めて何をなさるお積りですか」

今岡「我々は、名誉あるバタ島守備隊の最後の生き残りである。敵は、この村や我々の存在に気付いていない。この絶好の好機に一人（イチニン）十殺の攻撃をしかけるのだ。そして皇軍の最後の鉄槌を下し、目に物見せてやるのだ。そのためには、一兵でも多い方がいい」

大宮「村人は、民間人です」

今岡「それがどうした」

久保が村人を集め連れてくる。

久保「連隊長、集めてまいりました」

今岡「よし」

村人が不安げに今岡の前に集まってくる。

今岡「お前たちは、今から名誉ある皇軍の一員である」

村人たちがざわつく。

今岡「七生報告（しちしようほうこく）死んで悠久の大義に生きるを悦びとすべし」

久保「はい！」

久保だけが直立不動で敬礼している。

今岡「今からお前たちに手りゅう弾を渡す。（腰に下げた手りゅう弾の入った弾薬入れを久保に渡す）それを抱えて敵に飛び込んで行け！皇軍の真髄をみせてやれ」

久保が手りゅう弾を高橋や村人に配る。

久保「（配りながら）お前たちは、皇軍として、名誉の戦死ができるんだ！」

今岡「軍曹！」

久保「はい！」

今岡「まず、村人を先頭に立たせろ！お前たちはそのあとに続け。俺は、最後尾にいて、もし離脱して逃げ出すやつがいれば、容赦なくこの銃で撃つ。分かったか」

久保「分かりました」

今岡「お前たちが立派に敵に突撃したのを見届けてから、俺は軍人らしく腹を切る」

大宮が今岡の前に出る。

大宮「連隊長、民間人を巻き添えに出来ません」

今岡「守備隊は玉砕した。この島では、軍人であろうと、民間人であろうと関係ない。日本人なら、お国のために死ぬのは本望だろ」

大宮「連隊長、我々だけで突撃しましょう」

今岡「ダメだ！敵に少しでも多く打撃を与え、本土決戦への時間を稼ぐのが、我々の任務だ」

大宮「もう守備隊は全滅したのです。我々だけで」

今岡「(大宮を睨み付け) 貴様！」

高橋は思い詰めた様に手りゅう弾を握り締める。

大宮が村人の方に向き直る。

大宮「皆さん、解散してください」

村人が、ホッとして解散し始める。

今岡「貴様、将校のくせに、上官の命令が聞けないのか」

今岡が大宮を殴る。

倒れるが、立ち上がって今岡に詰め寄る大宮。

大宮「民間人を巻き込むのは重大な軍規違反です」

今岡「うるさい！この腰抜けが！」

今岡が銃を取り出し、大宮を狙う。

大宮「・・・」

今岡が大宮を撃つ。

大宮が倒れる。

場が一瞬にして、凍りつく。

驚く村人たちは、動けない。

高橋「小隊長！」

高橋が大宮に駆け寄り、大宮を抱きかかえる。

大宮「頼む、村の人を守ってくれ」

大宮息絶える。

高橋じっと大宮を見つめ、意を決したように手りゅう弾を握りしめる。

高橋「連隊長！」

高橋が、今岡を睨み、手りゅう弾の信管を抜く。

今岡「(恐怖)へえ!(逃げようとする)」

高橋「みんな逃げて!」

村人が慌てて逃げる。

高橋「ワーツ」

高橋が手りゅう弾を抱え、今岡に抱き着く。

今岡「ひえ!助けて」

今岡の絶叫と共に、抱き合った二人がぐるぐるくと回転する。

ドン!爆音。

一瞬の閃光。

暗転。

ラジオの音「バタ島守備隊2800人は、遂に悉く玉砕しました。

バタ島は、皇軍の真髓發揮の聖地として、永遠に悠久に歴史の上に記されることになったのであります」

○戦場・薪の場所

舞台中央の薪を囲んで、大宮、高橋、伊藤がいる。大宮たち三人は眠っているようだ。

村人たちが、少し離れたところから、大宮たちを囲んで、見守っている。

奥には、野火のように点々と明かりが見える。

静寂。

三人気が付く。

大宮「ここはどこだ。俺たちはどうなったんだ」

玉城「やっと、気が付いたね」

村人の話し方は、ゆっくりと威厳がある。

高橋「ここはどこですか」

宮里「あんた達と、出会ったところだよ」

三人が周りを見回す。

大宮「振出に戻ったのか・・・」

玉城「そうだ」

大宮「俺は、死んだんじゃないのか」

知念「ああ、あんたたちは、死んだ」

大宮「俺は、死んだ・・・」

伊藤「俺たちは、死んだ・・・」

宮里「でも、わたしの村で死んだんじゃないよ」

高橋「村で、死んだんじゃないんですか？」

玉城「ああ、あんたたちは、守備隊本部が壊滅したあの激しい戦闘で、

戦死したんだ」

大宮「俺たちは、自分が死んだことにも気づかなかったのか」

宮里「この島には自分が死んだことにも気づかずに彷徨っている魂が、

沢山いるよ」

村長「(ゆっくりと空を見上げ) 今岡連隊長と久保軍曹は、まだ、彷徨
つておられます」

高橋「自分たちが過ごしたあの村は何だったんですか」

宮里「あの村は、死を自覚し、魂を浄化する場所なんだよ」

大宮「そうだったのか。二回も死んだら厭でも自覚するよな」
フツと温かい笑いが起こる。

高橋「・・・(ぼそっと) 自分の短い人生はなんだったんだろ・・・」

大宮「お国のために戦って、戦死したんだ。名誉の戦死だ」

伊藤「お国ってなんやろ・・・戦死して、大切な家族を悲しませる。ほんまに、誰のための名誉の戦死なんや！」

大宮「名誉の戦死と思わないと、死にきれない・・・」

高橋「自分は・・・自分は・・・母一人子一人なんです」

大宮「・・・」

高橋「自分が戦死して、年老いたお袋は一人ぼっちになってしまった。
・もう親孝行もできない」

高橋が泣き出す。

伊藤「お国のために死んだけど、親不孝やな」

高橋「お母さん！(号泣する)」

大宮「・・・」

伊藤「・・・娘は、まだ二歳なんです。父親の顔も知らへん・・・」
伊藤も泣く。

静寂の中、二人の泣き声だけが聞こえている。

大宮がぼそっと歌います。

大宮「・・・命短し、恋せよ乙女

赤き唇 あせぬまに・・・」

大宮の低い歌声がしみじみと響く。

伊藤、高橋も歌いだす。

村人も、大宮たちの心に寄り添うように、歌いながら近づいていく。

歌声が、哀しく谷に響き渡る・・・

薪が、青白く光り出す。

「熱き血潮の 冷えぬまに

明日の月日はないものを・・・」

静寂。

大宮「・・・命短し、恋せよ乙女か・・・俺は家族も作れなかった・・・俺た

ちにもう明日はないんだ(すすり泣く)」

伊藤「(村人に) わてらこれからどうなるんや」

玉城「(優しく) あんた達の魂をこの島から、送り出すのがわしらの役

目なんだ」

大宮「魂？」

宮里「この薪の火を御覧なさい」

村人が、大宮たちを優しく包み込むように囲む。

大宮「これは火じゃない。蝶だ」

薪の青白い光が大きくなり、蝶の群れの光と分かる。

伊藤「ほんまや、光る蝶が集まっている」

玉城「ええ、あなたたちの魂は、この蝶になるんです。じっと蝶を見つ

めてください。そして蝶に魂を乗せるんです」

高橋「日本に帰れますか」

知念「ああ、魂はきつと日本に帰れるよ」

大宮「よし！我々は、蝶になって、靖国の杜で会おう」

伊藤「はい、靖国で」

高橋「小隊長」

大宮「何だ」

高橋「自分は・・・お袋の所へ行きたいです。魂だけでも、お袋の所に
帰りたい、魂だけでも・・・魂だけでも・・・お母さん、お母さ

ーん」

伊藤が高橋の肩を抱き、一緒に泣く……

遠くに野火のように見える光の中から「お母さーん、お母さーん」
と無数の声が、山彦のように聞こえてくる。

伊藤「わては……娘のとこやな。一目娘に会いたい……美代子く美代子く」

伊藤と高橋が、抱き合いながら泣いている。

大宮が、痛ましく2人を見る。

大宮「死んでも、こんなに切ないのか……」

玉城「ああ、わしらも苦しい……」

宮里「でも、あんたたちをこの島に残せないよ……」

玉城「じつとこの蝶の光を見つめなさい」

村人が、三人から離れていく。

宮里「光を見ながら、帰りたるところを一心に願うのです」

『月光』が流れる。

大宮「帰れるのか、魂は……」

村長「哀しい儀式です……」

三人は、思いを込めて、蝶の光を見つめる。

三人の目から、止めどなく涙が溢れてくる。

高橋「(切なく)お母さん……」

伊藤「(思い詰めて)美代子……美代子……」

大宮「(ボソツと)……俺も……母に会いたい……母の胸に、飛び

込みたい……お母ちゃん、お母ちゃんくお母ちゃんく(絶叫)」

絶叫とともに、三人が次第に、蝶の光に包まれる。

光の中で動かなくなった三人。

周りが暗くなり、光が大きくなる。

その光の中から蝶の一群が飛び出し、地上に未練を残しながら、しばらく旋回し、そして天に昇って行く。

暗転。

○戦場・岩陰（岩は舞台中央にある）

暗闇。

岩陰に横たわる二人だけが薄っすらと見える。

宮沢「・・・田中・・・」

田中「・・・はい・・・」

宮沢「・・・まだ、生きてるな・・・」

田中「・・・ええ、でも目を開けても何も見えません」

宮沢「この暗闇だ。星も見えない」

田中「自分は、もう足の感覚がありません・・・でもこの暗闇の中で死ぬのは嫌です」

宮沢「そうだな・・・せめて夜明けを待って手りゅう弾で自決しよう」

田中「手を繋いでももらえませんか。一人で死ぬのが怖いんです・・・自分分は憶病者です」

宮沢「誰だって、一人で死にたくないさ。手を繋いで死のう」

宮沢と田中が手を繋ぐ。

田中「宮沢さんの手が温かい・・・」

宮沢「何か『道行』みたいだな」

田中「道行？」

宮沢「ああ、『この世のなごり 夜もなごり 死に行く身をたとうれば、あだしが原の道の霜 一足づつに消えて行く 夢の夢こそあはれなれ』 曽根崎心中だ・・・」

田中「これが夢だったら・・・」

宮沢「夢の夢こそあはれなれ、か・・・」

岩陰にいる二人の周りが薄明るくなっている。

横たわっている瀕死の二人。

動かないので、死体のようである。

明るい光が徐々に二人を包み始める。

宮沢「少し明るくなってきたな」

田中「いよいよ夜明けですね」

宮沢「何か温かいものに包まれているような気がする・・・」

田中「実は、二人とももう死んでいたりにして」

宮沢 「そうだと良いな。もうこれ以上苦しみたくないよ」

田中 「ええ、このまま目を閉じて、何も聞こえなくなつて」

田中 目を閉じる。

宮沢 「田中、何かいる」

田中 が目を開ける。

青白い光が、二人の周りに見える。

宮沢 「蝶だ！俺たちの周りに蝶がいる」

田中 「本当だ！蝶が飛んでいる」

二人を包む光が大きくなり、それが蝶であると分かってくる。

宮沢 「(周りに目を凝らす) 夜明けじゃない！蝶だ！光る蝶が飛んでいるんだ」

蝶の数が多くなり、二人の周りを飛び始める。

田中 「綺麗だ。本当に綺麗・・・」

宮沢 「幻想的な光景だな」

二人は青白く光る蝶の中に身を横たえて、恍然と光の乱舞を見つめている。

田中 「・・・やっぱりもう天国にいるんじゃないですか」

宮沢 「そんな気持ちになるなあ。死ぬ前にこんな綺麗な光の中で、こんな穏やかな気持ちになれるなんて・・・」

田中 「神様のささやかな贈り物ですか」

宮沢 「本当に神様がいるなら、俺たちはこんな地獄のような酷い目には会っていないよ」

田中 「・・・」

蝶たちが青白く光りながら二人の周りを乱舞する。

宮沢 「昔から蝶には、死者の魂が宿ると言われているんだ」

田中 「美しいですね」

宮沢 「ああ、この世のなごりか・・・」

宮沢 が手榴弾を取り出す。

宮沢 「田中、いよいよお別れだな」

田中 「はい。お世話になりました」

宮沢 が、田中の肩へ手を置く。

田中 が目を閉じる。

宮沢 が手榴弾の信管を口で抜きかける。

田中「宮沢さん・何か・聞こえませんか？」

宮沢「蝶の羽音じゃないのか」

田中「違います。じっと目を閉じて聞いて下さい」

二人、蝶の光の中で、耳を澄ます。

宮沢「・・・ほんとだ、微かに何か聞こえる」

田中「蝶たちが何か囁いています・・・い、生きる・・・生きる・・・」

宮沢「俺にも聞こえる！生きる、生きる」

田中「この蝶たちが、自分たちの周りを舞いながら、生きる、生きる」と
合唱しているんです」

『生きる、生きる、生きる・・・』

戦友の声が合唱の様に聞こえてくる。

宮沢「何か、涙が出て来て、止まらない」

田中「自分もです」

『生きる、生きる、生きる・・・』

多くの戦友の声が、大きく聞こえてくる。

無数の光る蝶が、二人を包み込むように、乱舞している。

宮沢「きつと、この蝶たちは、この島で亡くなった戦友の魂なんだ」

田中「亡くなった戦友たちが、私たちを励ましてくれているんですね」

宮沢「そうだ。蝶になった戦友が、俺たちに生きるを励ましてくれているのだ」

田中「(泣きながら) 小隊長たちも、生きて、生きて日本に帰りたかったでしょうに・・・」

宮沢「この青白い魂の舞は、戦友たちの無念の思いなんだ」

田中「キラキラ光っているのは、戦友の涙ですね」

宮沢「(泣きながら) ああ、哀しい涙だ・・・」

二人は、戦友の涙を見つめる。

戦友の叫びを聞いていた宮沢が顔を上げる。

宮沢「俺たちは・・・この地獄の島で死ねない・・・死んではいけない」

田中「死んではいけない・・・」

宮沢「そうだ。俺たちは、無念の死を遂げた戦友の魂の叫びに応えるんだ。そして、生きるんだ」

田中「はい、生きています。たとえ捕虜になっても生き抜きます」

宮沢「どんなに酷い目に会おうとも、日本に帰って生き恥を晒そうとも、俺たちは生きるんだ！」

田中「はい」

宮沢「俺たちは、この島で亡くなった多くの戦友のためにも、生きて帰って、この馬鹿げた戦争の実態を日本に伝えるんだ」

田中「戦友の無念を、遺族に伝えます」

宮沢「それが戦友から託された俺たちの使命なんだ。この地獄を味わった俺たちの宿命なんだ」

田中「はい」

舞台全体が少し明るくなってくる。

『未完成交響曲』が流れる。

宮沢「朝だ・・・」

二人の決心を確認したように、光る蝶の群が二人を離れる。

二人の頭上を舞う蝶たち。まるでキラキラ輝く雲の見える。

田中「蝶たちが旅立ちます」

光る蝶の群れが飛び立つ。

二人は、必死に支え合って、もがきながら、何とか立ち上がる。

青白く光る蝶の群れが、客席の方へ消えていく。

田中「(飛び立つ蝶に向かって大きく手を振る) 大宮小隊長！高橋！伊

藤上等兵！関本上等兵！みんな、みんな、さようなら！」

宮沢「戦友たちの魂が、海を渡って、日本に帰るんだ」

田中「はい」

宮沢「(天空の蝶を見ながら)『蝶の皇軍』に敬礼」

宮沢と田中が、支え合いながら、必死に直立の姿勢を取り、蝶の皇軍に対して敬礼する。

朝日が、天上からの光の筋となり、二人を包み込む。
溢れる光の中の二人。

終